

信州の伝統的工芸品

信州打刃物

経済産業大臣指定伝統的工芸品 昭和57年3月5日指定



信州打刃物の概要

16世紀の中期、川中島合戦当時に、この地を往来した刀匠が武具刀剣類の修理を行い、里の人々がこの手伝いを通じて鍛冶の技を習得し、当時農具として必要な鎌を打ったと言われています。

刀匠のもたらした技術は、代々の職人たちに引き継がれ、磨き抜かれており、明治時代の後期には、生産と販売を分業化した問屋が

確立され、全国に販路が拡大しました。

伝統の技による鍛錬、均一な焼き入れ・焼き戻し処理がされており、適度な硬さと粘りがあり、砥石で研ぐことにより長く使用できます。鎌は刃幅が広く強靱であり、柄に差し込む部分を反らせる「芝付け」の加工などによって、使い勝手が良いとの評価を受けています。

【主要産地】 信濃町



歴史・沿革

今をさかのぼること450年程前の川中島合戦の当時、武器や刀剣類の修理のために当地へ移住してきた鍛冶職人に里人が鍛冶の業を習い、農具、山林用具作りに生かされました。その後次第に改良を加えながら、弟子から弟子へ、子から孫へとその技法が伝承されていきました。

文化、文政年間(1804年～1829年)柏原村の鍛冶職人専右衛門が、鎌の研究に専念しました。苦心のすえ使い易いように鎌の「コミ」を反らせ、芝付(腰入角)する方法を考案すると共に、薄くした鎌のくるいを防ぐため、「つり」をつけることも考案

しました。

同じ頃、古間の荒井津右衛門が、むずかしい地鉄と鋼の鍛接法の研究をかさね、割鋼から付鋼とし、厚い両刃型から薄くして軽くしかも堅牢で誰にも楽に刃が研げ、やわらかい草も切れる鋭利な薄刃型鎌の製造法を考案しました。

この両者の考案した鎌が現在に受け継がれています。

幕末から明治にかけて、鎌の販売を業とする者が出てくるにしがいい行商から仲買いへと発展し、明治の後期頃には生産と販売とを分業化した専門の間屋が確立しました。明治21年この地に信越線が開通したこと

により更に販売面にも拍車がかかり、全国的に販路が拡大されていきました。

昭和25年頃から動力ハンマー(スプリング)が導入され、差し手(向う鋸)に代り一人でも刃物が打てるようになりました。

また、動力の回転式円砥石やグラインダーが使用されるようになり、生産能率が向上しました。



産地の取組

伝統を受け継ぐ中での、生産効率の向上

信州打刃物の伝統を受け継ぎ、その良さを継承する中でも、生産効率が上がるよう、様々な取り組みを進めています。

機械ハンマーや円砥石などの導入や、プレス刃型による生産工程の削減も図っています。



商標の登録による認知度の向上

伝統ある信州打刃物の商標を「信州鎌」として、平成19年に登録しました。

伝統的工芸品としてだけでなく、商標を登録し、より多くの方に信州打刃物の良さを知っていただきたいと考えています。



アクセス



●信濃町ICから車で5分

信州打刃物工業協同組合

〒389-1312 長野県上水内郡信濃町富濃584-1
TEL026-255-6391 FAX026-255-6391
URL <http://www.alps.or.jp/uchihamono/>

◎山菜採り用鎌



◎草刈り用鎌



◎鉞(なた)



◎包丁



◎小刀



切れ味が良く、耐久性も

信州打刃物は、刀鍛冶の技術を習得したことから始まりました。
鎌全体の厚さが1/6という極めて薄い鋼部分はがねが特徴といえます。

草が根元から刈れ、刈り取った草が手元に寄るようにしている「芝付け」加工と、刃を薄くしても手元が狂わないよう刃面を内側に湾曲させる「つり」加工など独特の工夫がなされています。



炉で500℃程度に加熱する



小ならしで「つり」と「芝付け」をする

◆腰出し



◆押切り



◆焼き入れ



◆柄すげ



【製造工程】



技

今に息づく伝統の技

様々な機械や材料の工夫などをしていても、伝統の技は引き継がれています。

手と体が覚えた技を用いて、信州打刃物を製造しています。

450有余年続く信州打刃物の、切れ味と使いやすさは、熟練した技から生み出されています。



コミづくり